

# 物語空間と自己

## Narrative Space and Self

小田 隆博

ODA Takahiro

**Abstract:** Narrative space is the space where the talk of people is done in various forms. In the talk of people, we constitute various meanings. Experience of people is organized in the talk and develops it to a story. In a story, self of our own consists of it. In this paper, we consider a story that people tell and self.

**Keywords :** Narrative Space , Action ,Self

### I はじめに

空間に定位された身体の実行は、空間的な広がりの中で行われる。空間的な広がりの中での実行は、さまざまな姿勢のつながりである身体の実行として行われる。身体による姿勢のつながりとしての実行が生み出す実行のなかに、時間の流れは刻まれる。私たちの身体を伴う実行には、時間と空間が結合されて存在する。

語り、時間の流れとともにある。時間の流れが刻まれた実行として、私たちの語りは進行する。語る人が持つ時間、語られる人の時間、それぞれは独自の流れとともに進行する。語る人と語られる人の時間は、語りという実行のなかで交錯する。こうした時間の交錯は、語りに関わる人びとに、<いまここ>を、意識のなかで共有可能にする。

語る実行は、<いまここ>で行われる。<いまここ>では、人びとの語る実行が機能する。語り、単独の実行としては存在しない。人が語るためには、その語りを受け止める他者(語られる人)の存在が前提となる。語る実行は、語りへの応答と不可分の関係にある。語りへの応答は、語る実行へと向かうだけでなく、語る実行そのものの受容を語り手に示すことになる。こうした語りへの応答が、人びとを語る実行へとさらに駆り立てる。

医療現場で、ターミナル・ケアに関係した仕事に従事する人びとを対象としたアンケートに、次のような設問がある<sup>1)</sup>。

「わたしはもうだめなのではないでしょうか」という患者の言葉に対して、どう答えるかを担当者に回答を求めたものである。これに対して、5つの選択肢が挙げられている。

①「そんなこと言わないで、もっと頑張りなさいよ」と励ます。

②「そんなこと心配しないでいいですよ」と答える。

③「どうしてそんな気持ちになるの」と聞き返す。

④「これだけ痛みがあると、そんな気にもなるね」と同情を示す。

⑤「もうだめなんだ……と、そんな気がするんですね」と返す。

アンケートの対象となったのは、医学生、看護学生、内科医、外科医、ガン医、精神科医、そして看護師である。

アンケートの結果、上記の設問に対する回答は、医学生と精神科医を除く医師、看護学生と看護師が同じ傾向を示した。前者は①を選択し、後者は③を選択した。ところが精神科医が選択したのは、⑤の「もうだめなんだ……と、そんな気がするんですね」だった。

こうした結果から、中川米造は『医療のクリニック』のなかで、次のような分析を行っている。⑤の回答は、一見、なんの答えにもなっていないように見える。実際にそれは患者への回答になっていない。しかし選択肢の⑤は、医師が患者の言葉を確かに受け止めたという応答を、患者に示すものとして発せられている。患者は、得体の知れない不安におののきながら、その不安の実体は何なのか見つけようとする。そんな患者の心理は、聞き手の胸を借りることで、不安に立ち向かおうとする。探し求めた不安の実体を、表に出すことができれば、「それで不安は解消できる」。不安の実体を表に出すことができなくても、多くの患者は「解決の手掛かり」を、掴み出すことができる。選択肢の⑤は、不安に直面する患者への医師の応答として理解できるが、それは患者に対する<癒し>の言葉としての意味を持つと、中川は指摘する。

語りと語りへの応答のなかで、人はさまざまな意味のやり取りを行う。語りと語りへの応答は、<いまここ>に成立することで、語りに関わる人びとに時間の共有を可能にする。時間の共有は、意識の共有を生み、意識の共有は、不安な人の心を和らげる。それは不安な人の心が、語りと語りへの応答のなかで、自らの存在の確認へと向かうからである。

語りと語りへの応答のなかで、人はさまざまな意味を作り出す。そして人が作るさまざまな意味は、語りと語りへの応答が進行する過程で、人を行為へと導く物語として展開する。

本稿では、人びとの語り、物語へと展開する過程を考察するなかで、行為としての語りを持つ意味について考える。

## II 構成される自己

### 1. 社会的構成主義の視点

一つの出来事が複数の事実を生み、多くの人びとのなかに、それぞれの真実を構成する。

2003年10月29日の夜、中国西安の西北大学文芸会での出来事は、大規模な反日デモに発展した。11月29日、12月2日付け中日新聞によれば、10月29日夜、外国語学院の文芸会で、日本人留学生ら4人が、音楽に合わせてフラフラと踊っていた。会場は満員で、留学生たちは段ボール箱をかぶりシャツの上に女性の下着をつけていた。段ボール箱や体には、「日本人」「中国人」「酒井法子」「看(見る)」などが書かれていて、彼らの話す言葉は意味不明だった。観客の間にはざわめきが起きたが、幕が引かれ文芸会は続けられた。西北大電子学部2年の王は、日本人留学生の行為に「誰かをばかにしているとは感じなかった」と証言する。ところが翌日、王は校内に張られた壁新聞を見て「えらいことだ」と思った。昨夜の出来事が中国人への屈辱としてとられ、日本人留学生に抗議せよと扇動的な内容が書かれていた。文芸会を主催した学生幹部が声をあげたと思われる。その後、大規模な抗議デモへと発展し、文芸会に出演した学生たちは、退学を余儀なくされた。こうした抗議デモへ発展した背景として、多くの中国人は実際に日本人と接した経験がなく、彼らの間に日本人に対するマイナスのイメージだけが先行していたことと、一部の新聞やインターネットのニュースサイトで、事実無根の内容が、大きく報道されたことによるとされている。

「西安日本人留学生事件」は、文芸会での出来事が、複数の事実を生み、多くの中国人の間に、それぞれの真実を抱かせることになった事件として残された。

現実には社会的に構成される。

社会的構成主義の主張は、以上の言葉に要約される。私たちの生きる現実には、私たち相互の交流を通して社会的に構成される。私たちの思いや、他者との交流とは無縁のところには、現実が存在するのではない。他者との共同作業のなかで、現実が意味あるものとして、私たちの前に現れてくる<sup>2)</sup>。

社会的に構成される現実への視点は、バーガーとルックマンの問題意識に、その源をたどることができる。普通の人間はなんらかの問題でゆきづまりに直面しないかぎり、自分にとって何が現実で、自分が何を知っているかについて、思い悩んだりしない。彼の現実と知識は、自明のものとして、彼自身に受け取られている。ところが、「普通の人間はその所属する社会が異なるにしたがってまるで異なつた<諸現実>を自明」のものとして見なす傾向がある。バーガーとルックマンにとって、現実と知識の集合体は、特定の社会的な文脈と関係があり、これらの関係は、こうした文脈の「適切な社会学的分析」の対象に含まれなくてはならない。彼らは「知識社会学」こそが、現実の社会的構成の分析を問題にすると主張する<sup>3)</sup>。

バーガーとルックマンは、現実の社会的構成を分析する

視角として、三つの契機を用意する。「外化」「対象化」「内在化」がそれである。

「外化」は、私たちの内的世界の活動を外界に投影することである。外界に投影することで、私たちの内的世界の活動は、形あるものとして創造される。「対象化」は、「外化」された創造物(現実)が客観性を獲得する過程である。外化された現実には、私たちの前に客観性の装いととも現れる。客観性の装いのなかで、現実には固定化と普遍化を備えて行く。固定化と普遍化された現実には、強制力を持って私たちの行動を制約する。「内在化」は、「対象化」された現実を、内的世界に取り入れることである。固定化され普遍化された現実には、「内在化」することで、私たちの内面の支配へと、その軸足を移して行く<sup>4)</sup>。

以上の三つの契機により、社会は人間の産物であり、社会は客観的現実であり、人間は社会の産物であることが指摘される。

他方、バーは社会的構成主義の要件として、次の4点を指摘する。①自明の知識への批判的スタンスが必要である。これは、現実が存在すると見える、その見え方の前提を、常に疑うことの必要性を主張したものである。②歴史的文化的な特殊性を考慮に入れる。これは、私たちの理解に用いる方略やカテゴリーが、歴史的文化的特殊性を持つことへの理解である。③知識は社会過程によって支えられている。これは、人びとの間の日常的な相互作用を通じて、知識が構成されることへの理解である。④知識と社会的行為は相伴う。禁煙運動に象徴されるように、知識は人を社会的行為へと向かわせることに対する理解である<sup>5)</sup>。

現実が社会的過程と無関係に存在することを主張する本質主義に対し、社会的構成主義は、現実を構成する社会的過程に注目する。社会的過程を構成するのは、人びとの間の日常的な相互作用である。日常的な相互作用のなかで、人びとの語りは進行する。語りと語りへの応答が形作る世界は、社会的構成主義の視点が作り出す世界と親和性がある。

### 2. 氾濫する意味

現実には社会的に構成されるという社会的構成主義の視点は、現実を構成する意味が、社会的過程のなかで作られるとも言い換え可能である。多様に変化し高度に産業化した社会的過程のなかで、意味の大量生産が行われる。大量に生産された意味は、新たな社会的現実を構成する。

「西安日本人留学生事件」では、メディアにより大量に流された情報をもとに、人びとの間に特定の意味が形成され、一つの社会的現実が作られた。メディアが多様化し、伝統的メディアが独占した情報がもはや管理不能になった時、当局の管理出来ない方向に、社会的現実は動いた。氾濫する情報により作り出された意味が、新たな社会的現実を構成したのである。

文芸会の翌日、中国の伝統的メディアである壁新聞に、日本人留学生に抗議せよという扇動的な内容が掲示された。

文芸会を主催する幹部が声を上げたとされている。それに続き、一部の新聞やインターネットのニュースサイトで大量の事実無根の情報が流されるなか、氾濫する情報の作り出す意味が、人びとの間を浮遊した。氾濫する情報は、人びとが日常のなかで持つイメージを、特定の意味の下に拡大する。人びとの間に日本人に対するマイナス・イメージが先行するなかで、氾濫する情報は、マイナス・イメージだけを拡大する方向に意味を収斂させる。氾濫する情報は、歴史的文化的特殊性のなかで、特定の社会的現実を作り出す。

情報伝達手段であるメディアは、社会的過程を媒介する。社会的過程を媒介するメディアは、社会的現実の構成と不可分の関係にある。

イギリスのニューレフトの台頭、カルチャル・スタディーズの出現に影響を受けたマンターマンは、『メディアを教える』のなかで、「メディアは私たちの認識と思考を形成する。メディアは世界に関する情報を提供するだけでなく、世界をどのように認識し、どう理解すべきかを私たちに呈示する」と主張する。こうしたマンターマンの問題意識は、メディア・リテラシー教育への必要性に向かうこととなる<sup>9)</sup>。

「メディアは構成され、コード化された表現である」「メディアは現実を構成する」というコンセプトの下、メディア・リテラシー教育のカリキュラムは考え出された。カナダのカリキュラムでは、日常生活からメディアを考える視点を重視して、メディア・リテラシーの学習活動が行われている。その活動は、次の8つのコンセプトからなる<sup>1)</sup>。

- ① メディアはすべて構成されたものである。
- ② メディアは現実を構成する。
- ③ オーディアンスがメディアから意味を読み取る。
- ④ メディアは商業的意味をもつ。
- ⑤ メディアはイデオロギーと価値観を伝える。
- ⑥ メディアは社会的・政治的意味をもつ。
- ⑦ メディアの様式と内容は密接に関連している。
- ⑧ メディアはそれぞれ独自の芸術様式をもっている。

カナダは、メディア・リテラシー教育に早くから取り組んでいる。カナダの教育を考える上で見逃せないのが、国境を挟んで隣接するアメリカから、多様なメディアによる大量の情報が侵入することである。アメリカのメディアにより、一方的に構成されたアメリカ的現実が、国境を超えて容易にカナダ市民に呈示される。こうした「現実」が、メディア・リテラシー教育への要求と結びついた<sup>9)</sup>。

大量に生産された情報が、メディアを媒介することで私たちの社会的過程に侵入する。情報は意味を伴い、メディアは情報を媒介することで、情報の持つ意味が社会的過程に入ってくる。人びとの日常的な相互作用が行われる社会的過程で、それらの意味は人びとによる再編を受ける。再編された意味は、新たな社会的現実を構成する。

大量に生産された情報がメディアを介して、社会に送付され、私たちはそれらの情報を一方的に消費する。大量の

情報を消費する行為は、さまざまな意味を氾濫させる。氾濫する意味は、新たな社会的現実を構成する。社会的現実とは、内在化の過程を経ることで、私たちの存在を規定する。氾濫する意味の前で、意味に憑かれた人たちの自己は浮遊する。

### 3. 浮遊する自己

人間の産物としての社会が、客観的現実として私たちの前に現れ、社会的産物としての私たち人間が、客観的現実からさまざまな影響を受けるとき、人間の社会的性格類型に対する議論が展開される。

20世紀のファッション・マーチャンダイザーは、敏感な市場開発を狙い、より精密な顧客の分類を始めた。従来の分類法が、衣服のサイズに根ざしていたのに比べ、新しい分類法は顧客の心理の多様性を掘り下げた。生活習慣や人びとの生き方がいくつかのタイプに分類され、それらが、ファッションのタイプと組み合わせられた。アメリカロサンゼルスでは、こうした傾向を「典型的に捉えた」タイプとして、婦人ファッションを、以下の6通りに分類した。

- ① ロマンチック・タイプ——細くて若々しい
- ② 彫刻タイプ——背が高く、現実離れしていて、髪はブロンド
- ③ 芸術家タイプ——謎めいた雰囲気、どこことなくエキゾチック
- ④ 絵画タイプ——ソフトな輪郭
- ⑤ モダンタイプ
- ⑥ 伝統タイプ——年配。がっしりした体型、経済的観念が発達

20世紀の消費革命は、人びとの本能や、衝動、根本的飢えを刺激して、さまざまな商品を販売しようとしたが、上記のような消費者タイプの分類も、「人間の本質的な動機と本能を刺激するために活用」された<sup>9)</sup>。

人びとに対するこうした分類が機能するなか、リースマンは人間の社会的性格の類型に対する議論を『孤独な群衆』のなかで行った<sup>10)</sup>。

リースマンの問題意識は、人口が成長する段階は3つに分類可能で、それぞれの段階では「ことなる同調性」を生む。こうした段階では、それに対応した社会的性格が形成される、というところにある。「伝統指向」「内部指向」「他人指向」が、彼の指摘する3つの社会的性格の類型である。

「伝統指向」は、高度成長潜在期の社会的性格で、成員の同調性が伝統に従うことにより保証される。「内部指向」は、過渡の人口成長期の社会的性格で、成員の同調性は、幼児期にセットされた目標を内化する傾向により保証される。「他人指向」は、初期の人口減退期の社会的性格で、外部の他者の期待と好みに敏感であることが、同調性を保証するというものである。「他人指向」では、個人を方向づけるのは同時代人である。この同時代人は、直接の

知り合いかどうかに関係なく、メディアを通じて間接的に知っている人でもよい。同時代人を人生の指導原理にするということが、幼児期に植え付けられている意味では、この原理は「内面化」されている。「他人指向型」の人びとが目指す目標は、「他者からの信号に絶えず細心の注意を払うというプロセス」である。

「他者からの信号に絶えず細心の注意を払う」他人指向の社会的性格に属する人びとは、社会的な役割情報に敏感に対応する。モノが新種のステータス上の意味を帯び始める社会では、モノは、別種の意味の担い手として登場する。モノにより役割情報が伝えられるようになり、役割分化と匿名性が社会を覆い始めるようになると、モノを社会的アイデンティティの表現や手引きとして使うことが促進される。社会のなかでの役割分化と匿名性は、人びとがモノの消費へと向かうなかで進行する。「自己の独自性と自律性へのロマン派の固執、経験と創造性をとおしての自己実現への固執は、どちらも消費革命から引きだされ、またそれを派生した」。そこでは、「自己は消費をとおして確立され、消費が自己を表現する」との考えが広められた<sup>11)</sup>。

消費革命以降、大量生産されたモノが社会の至る所に流通した。流通した商品としてのモノは、人びとが大量消費する過程で、さまざまな意味の担い手として登場する。変化の激しい環境では、商品としてのモノの寿命は限られてくる。年単位の寿命を持つモノが、数ヶ月の単位になり、1ヶ月の単位、そして数日の寿命しかないモノまで、数多く現れてくる。短命のモノの氾濫である。

大量で短命のモノは、意味の氾濫を生む。他者からの信号に細心の注意を払う「他人指向」の人びとは、氾濫する意味の大海に投げ出される。氾濫し変化する意味の大海で、人びとはモノの消費を通して自己を確立しようとする。氾濫する意味は、大海を浮遊する自己を生み出して行く。

### III 物語の生成

#### 1. 生起する記憶

見るためには、常にひとつの視点と距離が必要である。距離を持つことで、私たちは見る対象を客観化することができる。そこには、空間的距離のほか、時間的距離も必要である。視点とは、一つの見方に立つある考え方を、対象に対して持つことである<sup>12)</sup>。

私たちの記憶には、<いま—ここ>にない数多くの出来事が刻み込まれている。一つの事象は、私たちが経験するという行為のなかで出来事になる。その出来事は、<いま—ここ>を離れ、既に記憶として刻まれた出来事との再編を通じて、記憶の奥に体験としてしまわれる。経験は、記憶のなかで構造化し組織化されて体験となる。記憶は、<いま—ここ>にない出来事を体験として蓄積することで、空間的・時間的距離を持つ視点を、私たちに与えてくれる。

記憶は、現在を生きる私たちに過去の自分とのつながりを与えてくれる。過去の自分とのつながりのなかで、私たちの現在は意味を持つ。そしてその意味の先に未来を位置

づけることで、私たちは、将来への希望を生み出して行く。

記憶は従来、記銘・保持・想起の3段階からなると考えられ、連合理論にもとづく言語学習理論では、記銘の過程は条件づけの過程と同義とされていた。条件づけの原理である刺激と反応による連合の形成が、記銘とみなされていたのである。その後、情報技術の開発・普及による情報処理モデルの台頭は、記銘・保持・想起からなる記憶過程を、符号化、貯蔵、検索からなる一連の情報処理過程とみなすようになった。記憶過程の情報処理モデルのなかで、私たちが議論の対象とするのは、記憶の二重貯蔵モデルである。記憶は、短期貯蔵庫と長期貯蔵庫から構成されるが、感覚器官から選択的に採取され短期貯蔵庫に貯蔵された情報が、長期貯蔵庫に転送されることで、ほぼ永続的に長期記憶として保持されるのが、記憶の二重貯蔵モデルである。長期記憶には容量の制限がなく、いったん長期貯蔵庫に入った情報は、忘却の彼方に向かうことはない。

長期記憶の内容は、宣言的記憶と手続的記憶に分けることができる。宣言的記憶は、言語化可能な記憶で、手続的記憶は自転車の乗り方のように、必ずしも言語化可能とは限らない。さらに宣言的記憶は、意味記憶とエピソード記憶に分けられる。そして、意味記憶やエピソード記憶がもたらす意味的な内容が、私たちに對し、さまざまな行為への指向を動機づけることになる。記憶は、私たちのあらゆる認知的な活動を支える精神機能として存在する<sup>13)</sup>。

意味記憶は、世界についての一般的な事実から成り立っている。時計の一般的機能やメカニズム、典型的な特徴が意味記憶として私たちの長期貯蔵庫に保持される。エピソード記憶は、個人的経験にもとづくもので、個人の出会った出来事や人びと事物などの自伝的な記憶である。私が子どもの頃、父親から譲り受けた時計に対して持つ外形や機能・由来などは、エピソード記憶に属する。エピソード記憶には、一般的に、事物や出来事に対する時間と場所に関する情報も含まれる。時間と場所に関する情報には、その出来事に対する因果を含むものもある。つまり、特定の文脈と結びついて存在するのが、エピソード記憶である。意味記憶とエピソード記憶は、相互に独立した記憶として存在するのではない。実際には、両者は密接な関係があり、双方の記憶の間には相互浸透がある。時計についての意味的な記憶は、一つひとつの時計に対する固有の経験が、抽象化と一般化を経て築き上げられたものとして考えられている<sup>14)</sup>。

エピソード記憶は、特定の文脈と結びついた記憶である。特定の文脈は、特定の空間や時間と結びついて存在する。

自分自身の過去を写したアルバムのなかに20年前の私、10年前の私、5年前の私がいる。そして昨日の私、今日の私、それぞれの私が存在する。こうした私を、一人の人間として捉えることを可能にするのは、記憶のなかの時間的な流れのなかに、それぞれの私の位置づけが可能になるからである。記憶は、<いま—ここ>にない出来事を体験として蓄積する。ひとつの出来事が、体験として記憶の淵に

残されるのは、現在につながる時間の流れのなかにその一コマが、記憶の淵として堰き止められていることによる。

記憶は、時間をつなぎ止めるとともに、現在との関係のなかで過去を再編する。再編された過去は、新たな記憶の流れのなかに時間を堰き止める。記憶の再編は、過去を新たなエピソードとともに再生する。

## 2. 行為としての語り

言葉を発話する営みは、身体の内側から発し他者に向かう行為として存在する。発話する行為のなかで、言葉が生きて他者に届けられるためには、行為の持つ意味が、言葉のなかで輝きを持って他者に向かわなくてはならない。

発話は沈黙を含む行為として、私たちの前に現れる。言葉はそれに先立つ沈黙により是認され、正当化される。沈黙は、発話行為のなかで言葉と表裏一体の関係にある。沈黙という曖昧模糊とした世界のなかから、明確で、限界づけられ、徹頭徹尾現前性を有する言葉が生み出される。言葉の持つ現前性は、発話による表現に向かう行為のなかで、沈黙を要求する。突然の事故で子供を失った親の前に、言葉は宙を舞い意味へと到達不可能なものとして現れる。子供への思いは、明確で、限界づけられた言葉の表現可能な枠を超えて膨らんでゆく。発話としての沈黙は、言葉を超えた意味の世界を、沈黙という行為のなかにさまざまな形で内包する。沈黙は一つの世界として存在する。沈黙という行為とともに、言葉はさまざまな意味を表現として私たちの前に現れてくる。「沈黙の世界と言葉の世界とは互いに向かいあって」私たちの前に存在する<sup>15)</sup>。

沈黙の世界と言葉の世界が相互に向かいあうのは、発話が、人間の声の現前性を前提とすることによる。声は発せられた瞬間に、何の痕跡も残すことなく私たちの前から消えて行く。祝祭のなかで、声を発することが意味を持つのは、こうした声の持つ現前性が、時間を凝縮した瞬間の行為として行われることによる。

声を発する行為である発話は、声を受け止める他者の存在を前提する。他者に対して、声を用いて呼びかける。呼ぶことは、他者に「訴えることであり、問うことであり、思慕うこと」である。声を発することは、発話行為を支える「状況性と、声を発する現前性と、声を向けられた相手の特定性」巻き添えにして成立する。声は、私たちの身体から発せられる。発せられた声は、私たち自身から離れ、他者との共有の産物となる。言葉を発する行為としての発話は、他者との共同の行為として行われる<sup>16)</sup>。

西アフリカ内陸のサバンナでトウジンビエ、モロコシ等を主作物とする焼畑農耕民を調査した川田順造は、モシ族の語りについて、次のような指摘を行っている<sup>17)</sup>。

モシ族で昔話が語られる場合は、ソアスガと呼ばれる。ソアスガは、とどまる、坐っている、おしゃべりするなどの意味をもつ動詞「ソセ」の名詞形である。昔話の語られるソアスガは、主作物の取り入れも済んだ農閑期、乾期で雨が降るおそれのない涼しい時期の12月から3月頃にかけて

の夜、特によく行われる。夕食をすませたあとの露天の「にわ」の月のあかりの下、車座になり、家族とその近隣も加わり多くの人びとがソアスガの場で、なぞなぞや昔話しを始めるのである。

昔話の語られる場合は、人びとの自主的、偶発的な行為(そこに居合わせた人びと)により作られる。途中で退出したり、横になって眠ってしまったたりして、語りの輪からはずれる人もいる。仮りそめでゆるやかな集合だが、生活の他の側面では十分親しい人たちが集まっている。場を構成する人びとは、自らが情報の発信者となることで、声のパフォーマンスを通じて語りのなかに参加する。文字がなくて、現在でも声による伝達に大きな価値の置かれているモシ族では、昔話は聞くことよりも、話すことに大きな喜びが見出されている。話しがたとえ拙くても、場を構成する人びとが、自らの声でその場に加わるよう促し、助ける。そこから聞き手による訂正や助け船が生じ、部分的な代わりの語り、語り継ぎが生じる。そこでは、モノログとしてではなく、場を構成する人びとの共同の行為として、語りが行進する。

商いの語りは、徳川時代の商人のなかで行われた。商人たちは同じ商人たちに向かい、商いの成立基盤を納得いくまで語りきかせることで、毎日の暮らしの内側に潜む経済に対する主導権を握ろうとした。そこで繰り返し強調されたのが、経済を実践するのに不可欠な倫理性である。こうした商いの言葉は、「アジア的」とも考えられ、「無尽樽」「頼母子講」「舫い」「備荒貯蓄」として知られた「請」のなかの語りとして扱われていった。「請」のなかでは、各人は誰に対しても貸しがあると同時に借りもあると考えられていた。「請」のなかでは、集団の考えにより、取り決めや契約の条件が決まっていた。契約といった考えが、自由意思を持つ二人の個人の間というよりも、「請」に参加する全ての人びとのなかで、次第次第に作り上げられたのだった。「請」に参加する人びとの語りのなかで、個々の契約は作られていった<sup>18)</sup>。モシ族のソアスガや徳川時代の「請」は、行為としての語りとともに存在した。

## 3. 展開する物語

モシ族のソアスガでの語りは、一人の話し手が多数に向かう伝達行為として行われる。話し手の長い語りは、ソアスガである語りの場により支えられ、形作られる。聞き手の相づちやさまざまな言葉の介入があって、ソアスガでの語りは進行する。語りの内容は修正され、忘れたりつかえたりしたところを、参加する人びとにより補ってもらいながら、語りは進行する。聞き手は、受動的な受信者ではなく、同時に「潜在的な話し手」でもある。話しを声で「実現する」ことに参加し、さらに次の話し手になる場合もある。ソアスガの語りは、潜在的な話し手である聞き手の見守るなか、話し手の声により作られる共同行為として行われる。言葉を通じた共犯関係のなかで、モシ族の人びとの

語りは進行する。モシ族の語りは、「話の共同体」と無縁には存在しない<sup>19)</sup>。

「共同体」のなかの語りは、社会的知能を構成する。社会的知能は、「集団共生型知能」であり、自らが属する社会集団のなかで円滑に振る舞うために必要とされる知能である。社会的知能は、次のような能力により特徴づけられる<sup>20)</sup>。

- ① 集団を形成・維持する能力。集団における共生は、新しい集団の形成、または既存の集団への参画から始まる。集団の形成・参画には、集団内で暗黙の内に人びとが行う儀礼的慣習への理解が必要とされる。集団の形成維持には、社会的行為の適切な状況での遂行能力と他者の社会的行為を認識する能力が要求される。儀礼的慣習は、集団を形成維持するのに必要な社会的行為が無意識の体系として制度化されたものである。
- ② 集団的合意の形成・認識能力。集団内で他のメンバーと共生するためには、他のメンバーとの情報の共有、行動の協調・調整と、それに必要とされる合意形成が求められる。集団的な合意には、慣習や行動規範のように、長期にわたり比較的安定的に機能するものと、短い期間の間で頻繁にやり取りされるものがある。こうした合意形成に必要とされるのは、言語を中心としたコミュニケーション能力である。
- ③ 合意に基づく行動制御の能力。合意形成は、協調的な集団行動の実現に寄与する。合意には、他者の行動を理解するだけでなく、自らの行動を調整する能力が要求される。これは、他者との目標の共有と共有意図を形成することで実現可能となる。自らの所属する集団の規範や慣習を遵守するための行動を動機付けるだけでなく、合意に対する行動を制御する社会的感情(達成感や責任感等)と、密接に関わりがある。

「話の共同体」では、新奇性のある内容が語られることはあまりない。そこには聞き手にとって新たな情報は、ほとんどないと考えられている。それにも関わらず、モシ族のソアスガが語りの場として機能するのは、個々の話し手の演技性により生み出される「言表」のおもしろさを聞き手が求め、享受するからである。モシ族の語りの場では、話し手の演技性が要求されるが、同時に、話し手の巧拙を問わず、語るという行為自体に基本的な価値が置かれる。人びとは、拙い語り手をシンローグ(協話)により助けながら、より演技性の大きいパフォーマンスを作ろうとする。そしてその助け合いのなかで、未熟な参加者が「話の共同体」に加わることを、人びとは励ますのである<sup>21)</sup>。

「話の共同体」のなかで、人びとの語りは進行する。そしてその語りは、人びとが行う共同の行為のなかで、物語へと展開する。

語りは、言葉により私たちの経験を組織化する。経験は、

言葉を用いた組織化の過程で私たちの記憶の淵に刻まれて行く。物語はこうした経験の組織化の過程で生成されるが、物語独自の特性のもとに、その組織化は行われる。

物語の特性の第一は、そこに内在する時系列性にある。話しと物語は異なる行為と考えられている。なぜなら、物語にはある種の起承転結が必要とされるからである。物語の起承転結は、そこに内在する時系列性を前提にしている。一つの事象、精神状態、そして登場人物である行為者に関わる事件などの一連の流れが、一つの時系列をなし、起承転結を構成する。物語の二つ目の特性は、それが一つのストーリーとしての力を失うことなしに、「事実」上のことにでも「想像」上のことにでもなり得ることである。物語を構成する個々の出来事の、どれが真実でどれが偽りであるということよりも、出来事の時系列性が、物語のストーリー把握をもたらす私たちの心的体制を保証する。こうした私たちの心的体制は、ストーリーを背後で支える形式の蓄積だけからは生まれぬ。物語の形式は、話しを語るといふ古代からの遺産を受け継いでいる。物語の背後には、古代から受け継がれた形式の蓄積と、その形式を支える因習と伝統が存在する<sup>22)</sup>。

「話の共同体」には、人びとより受け継がれてきたさまざまな因習や伝統が存在する。そうした伝統のなかで、語る行為の持つ演技性は、人びとの励ましにより開花する。展開する物語は、人びとの語る行為の相互性のなかで、進行する。

#### IV 物語空間と自己

##### 1. 行為する自己

話し手の演劇性は、語る行為のなかで進行する。語り手が、演劇性を持つ行為として私たちの前に現れるのは、語り手が、人間の身体から発せられる声と結びついた存在であることに起因する。言葉が声として機能している文化では、語りは、美しい言葉による演劇性を生み出して行く。言葉による演じ語りは、高度に芸術的で人間的な価値を持って私たちの前に現れるが、書くことが人びとの心をとりにするようになると、語りの持つ意味が、それまでとは異なるものとなる。

あらゆる言葉は、声により発音された瞬間、韻律性を帯びている。韻律性は、声を持つ音としての高さ、強さ、長さとして現れる。話す行為のなかで、言葉の持つ分節的側面が優位になり、言葉の持つ概念的意味、明示化された意味が前面に顔を出す。そして、唱え、唄うなかで声の持つ韻律性が、その姿を現してくる。「話の共同体」の演劇性は、語りの声を持つ象徴性にその源がある。言葉から分節的側面が消去され、韻律的側面が現れるとき、「話の共同体」の演劇性に一步近づくことになる。語る言葉には、息、声、韻律性と時間性が含まれる。そしてそれらの特性が、声の持つ象徴性を保証する。文字は、声の持つこうした側面を捨て去り、言葉を固定化し、視覚の領域に位置づける<sup>23)</sup>。

オングは、声の文化と文字の文化に生きる人びとを比較するなかで、声の文化に生きる人びとの語りに注目する。

オングによれば、ホメロスは文字を知らなかったが、そんな彼が詩を生み出すことが出来たのは、記憶という能力のおかげである。声の文化における記憶は、文字にもとづく文化のなかでそれが演じているのとはまったく異なる役割を果たす。ホメロスの詩に特有の言葉使いは、詩が口頭で組み立てられるという制作方法により強いられた思考のエコノミーである。それは、声の文化に属する人びとの認識世界ないしは思考の世界全体が、「陳腐な常套句」に代表される決まり文句的な組み立てに頼っていたことによる。言葉が声であるような文化においては、いったん獲得した知識は、忘れないように絶えず反復しなくてはならない。知恵を働かすため、また、効果的に物事を処理するためにも、固定化され定型化した思考のパターンが求められる。文字による書かれたテキストは、記憶を助ける決まり文句のなかではなく、テキスト自体のなかに知識を蓄える道を拓いた。テキストを用いることで、陳腐な常套句の言い回しから開放された精神は、固定化され定型化された思考のパターンから解放されて自由になり、独創的で抽象的な思考を可能にした。テキストが可能にした新たな世界のなかで、伝統的な詩人のだれもが愛用した決まり文句や常套句は、ものを作り出すことの邪魔となる。文字の文化では、多くの詩人達が愛用した決まり文句や常套句は、時代遅れの遺物になっていった<sup>24)</sup>。

声の文化と文字の文化は、人びとの思考のあり方を変化させる。声の文化では、人は定型化と反復行為のなかで、自らの思考を組み立てる。文字の文化では、視覚的世界であるテキストに書かれた文字との対話を通じて、人は自らの思考の世界を拡大する。行為する人びとは、それぞれの文化のなかで、異なる自己を生みだして行く。

幾何学的な図形、抽象的なカテゴリーによる分類、形式論理的な推論の手続き、包括的な記述や言葉による自己分析を、文字の文化に生きる人びとは経験する。声の文化の人びとは、分析的でなく、冗長で多弁的であり、保守的ないし伝統主義的で、生活世界そのものと密着し、物事に対し感情移入することで客観的な距離を取ることが出来ないばかりでなく、状況依存的で抽象的な思考とは無縁である<sup>25)</sup>。声の文化と文字の文化は、経験の組織化に関係することで、その文化を生きる人びとの思考の組み立てに影響を与える。

話し言葉は、人と人との間に成立する。言葉により、聞く人と話す人が向かい合い、直接、専一の関係に入り、ありありと相互に感じ合うことが可能になる。人が言葉により話す行為は、自他未分化の体全体が二人の間に存在することを了解し合うことである。言葉として述べられた言語を対象化して味わったり、理解したり評価することとは別次元のことである<sup>26)</sup>。

話すには、話そうとする相手の精神と、話す前からある種の関係にあることが必要とされる。言葉は、言葉以外の

ものより作られる状況と結びついて存在する。言葉を話す行為には、話しに関わる聞き手の精神を事前に感じ取ることが求められる。こうした状況のなかで、話し手聞き手の間に、相互の了解が作られる<sup>27)</sup>。

文字の文化は、私たちに形式的で抽象的な思考をもたらすことで、個人の内面との対話を可能にする自己の形成を促した。それに対し声の文化は、言葉を話すという人びとの共同性のなかで成立する自己のあり方を、私たちの前に示すことになる。

## 2. 物語空間と自己

物語は、過去や現在の出来事または経験が、機械的に配列されたものではない。物語は、無数の経験や出来事のいくつかを選択し、それぞれをなんらかの意味を持つものとして関連づけ、時間的に配列し構成することにより作られる。「語り」は、時間的展望を兼ね備えた筋を持つものとして、経験を「象る」ことである。物語は、事実をそのまま記述したものでなく、語られる筋により事実が選択的に配置されるため、そこにはいくばくかの虚構を含むことがある。「語り」はつねに「騙る」ことを内包する。物語は、出来事や経験を結びつけ構成する解釈行為であり、現在の立場から、過去を解釈し再構成することである。過去を物語る行為は、現在を生きる私たちの行為を方向づけるだけでなく、未来への期待を成立させる<sup>28)</sup>。

経験を「象る」時間的展望には、個人が状況の直接的な規定をまぬがれ、発達や行動の自己決定を行う際に必要とされる機能が含まれる。時間的展望に対しては、以下の3つの機能が指摘されている<sup>29)</sup>。

最初に指摘されるのが、動機づけの機能である。これは、将来に対する希望が時間的な流れのなかで、具体的目標としてブレイクダウンされた場合、個々の目標を達成することが、その先にある希望にたどりつくこととなる。時間的展望の動機づけ機能は、将来に対する希望を「目標の階層構造」に分割し、その階層構造を時間的な流れのなかに展開することで、希望に向けての行動を具体化する。次に指摘されるのは、人格的機能である。私たちは、過去の出来事そのものを変えることは出来ないが、その出来事の意味を現在の立場から改変することは可能である。過去に対する意味づけは、自分自身の未来への新たな展望を可能にすることで、現在の行動を意味づける。現在の行動の意味づけは、人格や自己の統合を可能にする。そして第3が、共同化の機能である。時間は、人間が共同行為を行う上で、その行為を統制する手段としての働きがある。近代の工場労働では、さまざまな分業により大量生産が可能になったが、こうした分業は、厳しい時間管理と結びついて存在した。生産計画に沿った生産体制が可能になったのも、計画を時間的な流れのなかに展開可能にしたからである。

時間的展望は、過去を現在の立場から再編するだけでなく、過去から現在へと続く時間的な流れの延長線上に、将来に対する希望を位置づけ可能にする。時間的展望は、過



去や現在の経験や出来事の時系列を再編し、その時系列の延長線上に新たな未来を構築する。こうした出来事の時系列性は、物語の特性の一つである。

私たちが過去に経験した出来事は、客観的な事実として記憶なかに保存されるのではない。過去の出来事は、現在の立場からさまざまな改変を受ける。その改変の内容が、過去から現在へ続く事実の時系列の持つ意味を再編する。新たに再編された意味は、未来への動機づけとなり、私たちの前に現れる。自伝的記憶の研究によれば、多くの出来事は時間的配列として体制化され、その出来事が生じた順番に再構成されて再生されることが明らかにされている。再生する出来事が2年以上前のものでは、時間配列的な探索よりもカテゴリー的な探索が優位になることもある。これは、時間にもとづく記憶表象が、カテゴリーにもとづく意味的な記憶表象に置き換わったことを反映している。またある出来事は、「継起過程」により体制化されている。「継起過程」とは、仕事や結婚生活などのように継続する事象である。「継起過程」のなかには、特定の出来事やエピソードが含まれる<sup>30)</sup>。

自伝的記憶は、私たち自身の自己に対する認識を含んだ記憶として存在する。10年前の私、5年前の私、今年の私、昨日の私、そして今日の私、それぞれの私を結びつけ、一人の私として統合可能にしているのが、時間的配列や「継起過程」のなかに、一つの意味の流れを形成可能にするストーリーの存在である。そしてそのストーリーのなかで、私たちが経験した多くの出来事は、結びつき筋立てられて存在することになる。

物語を「2つ以上の出来事をむすびつけて筋立てる行為」と定義するやまだようこは、語りを、絶えず作られ組み替えられる生成プロセスとして捉える。そしてそのプロセスのなかで、語りの筋立て行為は行われる。物語は、一つの構造として静的な形で存在するのではなく、人生を変化させていく生成的物語として現れる。私たちは、外在化した行動や事件の総和として存在するのではなく、一瞬ごとに変化する日々の行動を構成し、秩序づけ、経験を組織化し、それを意味づけながら生きている。やまだによれば、経験の組織化、そしてそれを意味づける「意味の行為」が、ひとつの物語として私たちの前に現れ、私たち自身の自己を規定する<sup>31)</sup>。

## V おわりに

物語は、私たちの経験を組織立てて理解するための基本的な枠組みを提供する。生きた経験は、物語のなかでさまざまな解釈を受ける。私たちは、自らの物語の出演者であるとともに他者の物語の出演者でもある。こうした物語のなかで、私たちは自らの人生を生きることとなる。私たちの経験を組織化する物語の役割には、次のものがある。①ある経験が他の経験とどのような関係にあり、いかなる意味を持つかを決定するのは、その経験を組織化する物語である。②経験のなかのどの側面が切り取られ表現されるか

は、物語が決定する。③経験をどう表現するかを決定するのも、物語である。④これらの物語が、人びとの生き方や人間関係に大きな影響を与え方向づける<sup>32)</sup>。

語りは象りと語源を同じくする。象りには、物の形をそっくり写し取るという意味がある。語りは、語る行為のなかで私たちの経験を写し取る。言葉は私たちの経験に形を与え、それを明瞭な輪郭を持つ出来事として描き出し、他者の前に呈示する。本人のみにより接近可能な私密的「体験」は、言葉を通じて語られることにより公共的な「経験」となり、「伝承可能あるいは蓄積可能な知識として生成」される。語ることは、「人と人との間に張り巡らされた言語的ネットワークを介して「経験」を象り、それを共同化する」行為にほかならない<sup>33)</sup>。

私密的な体験が、語りのなかで共同の経験に転化し、経験の持つ共同性が、その経験が与えるリアリティを支えるようになる。こうした共同性が支えるリアリティについて、アレントは『人間の条件』のなかで、次のように記述している。

「私たちは、ただ、私生活や親密さの中でしか経験できないようなある事柄について語ることがある。この種の事柄は、その内容がどれほど激しいものであろうと、語られるまでは、いかなるリアリティももたない。ところが、今それを口に出して語るたびに、私たちは、それをいわばリアリティを帯びる領域の中に持ち出していることになる。いいかえると私たちが見るものを、やはり同じように見、私たちが聞くものを、やはり同じように聞く他人が存在するおかげで、私たちは世界と私たち自身のリアリティを確信することができる。」<sup>34)</sup>

私たちの経験は、語ることを通して共同化し、共同化することで、経験はリアリティを帯びて私たちの前に現れる。経験の組織化である物語には、その物語を支える他者の存在が必要とされる。

自己は、他者を抱え込むことなしには生きえない存在である。私が私の物語を語れば語るほど、その物語のなかに私のリアリティを支える他者が必要となる。そこでは、「プライベートに閉じた「私」という概念が解体されて、自己が公共の場にひらかれて」いる。「経験の共有者」としての「私たち」が、私の物語の前提として必要とされているのである<sup>35)</sup>。

「話の共同体」のなかで、人びとの語りは進行する。そして語り人が人びとの経験を組織化し、物語として展開するなかで、人びとの経験は共同化される。共同化の過程で経験は、リアリティを帯びたものとして人びとの前に現れる。こうした経験の持つリアリティが、「話の共同体」に属する人びとそれぞれの自己を支えるものとなる。

物語空間を形成する人びとの共同性が、人びとを支える固有の物語を生成するという逆説のなかで、私たちは私たち自身のリアリティを確信する。



謝辞

本稿執筆に際して、環境経営研究所共同研究参加者との議論を参考にした。また、環境経営研究所より研究費の給付を受けた。関係者の皆様に感謝します。

注

- 1) 中川米造(1994)、pp. 338-342。
- 2) 小森康永他編(1999)、p. 18。
- 3) バーガー=ルックマン(1996)、pp. 2-4。
- 4) バーガー=ルックマン(1996)、pp. 104-105。
- 5) ヴィヴィアン・バー(1997)、pp. 3-7。
- 6) 鈴木みどり編(2003)、p. 32。
- 7) 鈴木みどり編(2000)、pp. 24-25。
- 8) 菅谷明子(2000)、pp. 87-90。
- 9) スチアート&エリザベス・ユーウエン(1995)、pp. 269-271。
- 10) リースマン(1992)、pp. 7-25。
- 11) グラント・マクラッケン(1990)、pp. 40-49。
- 12) 槇文彦(1997)、p. 166。
- 13) 高野陽太郎編(1996)、pp. 9-16。
- 14) ギリアン・コーエン他著(1989)、pp. 43-45。
- 15) マックス・ピカート(1977)、pp. 17-21。
- 16) 川田順造(1988)、pp. 5-6。
- 17) 川田順造(2001b)、pp. 50-58。
- 18) 栗原彬他編(2000)、pp. 19-48。
- 19) 川田順造(2001a)、pp. 110-112。
- 20) 片桐恭弘(2003)、pp. 1233-1238。
- 21) 川田順造(2001a)、pp. 187-189。
- 22) ブルーナー(1999)、pp. 61-65。
- 23) 川田順造(2001a)、pp. 17-18。
- 24) オング(1994)、pp. 44-58。
- 25) オング(1994)、pp. 82-124。
- 26) 竹内敏晴(1997)、p. 133。
- 27) オング(1994)、pp. 358-359。
- 28) 河合隼雄(2001)、p. 117。
- 29) 白井利明(1997)、pp. 4-7。
- 30) ギリアン・コーエン他著(1989)、p. 48。
- 31) やまだようこ編著(2002)、pp. 2-5。
- 32) シーラ・マクナミー他編(1999)、pp. 141-143。
- 33) 市川浩他編(1990)、p. 55。
- 34) ハンナ・アレント(1999)、pp. 75-76。
- 35) やまだようこ編著(2002)、p. 30。

参考文献

- 1) ヴィヴィアン・バー(1997)『社会的構築主義への招待』川島書店。
- 2) オング(1994)『声の文化と文字の文化』藤原書店。
- 3) ギリアン・コーエン他著(1989)『認知心理学講座1 記憶』海文堂。
- 4) グラント・マクラッケン(1990)『文化と消費とシンボルと』勁草書房。
- 5) シーラ・マクナミー他編(1999)『ナラティブ・セラピー』金剛出版。
- 6) スチアート&エリザベス・ユーウエン(1995)『欲望と消費』晶文社。
- 7) ハンナ・アレント(1999)『人間の条件』筑摩書房。
- 8) バーガー=ルックマン(1996)『日常生活の構成』新曜社。
- 9) ブルーナー(1999)『意味の復権』ミネルヴァ書房。
- 10) マックス・ピカート(1977)『沈黙の世界』みすず書房。
- 11) リースマン(1992)『孤独な群衆』みすず書房。
- 12) 市川浩他編(1990)『現代哲学の冒険8 物語』岩波書店。
- 13) 片桐恭弘(2003)「ロボットの社会的知能」情報処理学会編『情報処理 Vol. 44 No. 12』情報処理学会。
- 14) 河合隼雄(2001)『心理療法と物語』岩波書店。
- 15) 川田順造(1988)『聲』筑摩書房。
- 16) 川田順造(2001a)『口頭伝承論上』平凡社。
- 17) 川田順造(2001b)『口頭伝承論下』平凡社。
- 18) 栗原彬他編(2000)『越境する知2 語り：つむぎだす』東京大学出版会。
- 19) 小森康永他編(1999)『ナラティブ・セラピーの世界』日本評論社。
- 20) 白井利明(1997)『時間的展望の発達心理学』勁草書房。
- 21) 菅谷明子(2000)『メディア・リテラシー』岩波書店。
- 22) 鈴木みどり編(2000)『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』世界思想社。
- 23) 鈴木みどり編(2003)『メディア・リテラシーの現在と未来』世界思想社。
- 24) 高野陽太郎編(1996)『認知心理学2 記憶』東京大学出版会。
- 25) 竹内敏晴(1997)『ことばとからだの戦後史』ちくま書房。
- 26) 中川米造(1994)『医療のクリニック』新曜社。
- 27) 槇文彦(1997)『記憶の形象上』筑摩書店。
- 28) やまだようこ編著(2002)『人生を物語る』ミネルヴァ書房